今江祥智の本

第31巻

2杯目のスープ

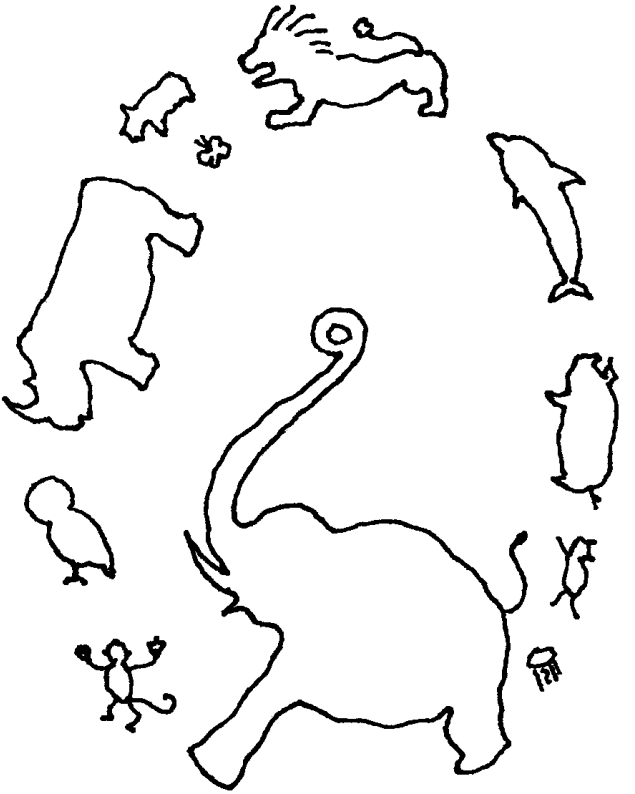
理論社

今江祥智の本

第31巻

2杯目のスープ

今江祥智の本 第31巻
一九九〇年一月初版
一九九〇年一月第一刷
著者　今江祥智©
発行　株式会社理論社
東京都新宿区若松町一五—六
電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉
振替東京九—九五七三六
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。



オーケストラ物語 7
タクトちゃん 9
クラちゃん 12
フンボルトさん 15
わらいゴリラ 18
お守りグマ 21
ホルン迷路 24
しっぽエレジー 27
ハープわらい 30
ゾウのピッコロさん 33
リスとファゴット 36
ボレロ鳥 39
チューリップとチョウ 42
イスとヤドカリ 45
ホールとふろば 48
ウサギ耳一家 51
2杯目のスープ 57
ヒコーキざむらい 59
クリスマスなんて知らないよ 64
かくれんぼトランプ 68
タコたこあがれ 73
ふしぎな目 77
入学式のことだった 82
コイのぼり空にながれて 87
ふくろうもりのはなし 92

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夏がきた…　98
のりものづくし　103
セーター動物園　108
しゃらくさいじいさまの話　113
おりがみのできた日　118
モンタンちゃんパリへいく　123
としのはじめのゆびきりげんまん　130
雪の夜のものがたり　136
思いだしわらい　141
ムカシごっこ　146
UFOすくい　151
雨童子　155
おくれ七夕　160
ハンモックちゃん　165
おそろしいものなんだ　172
三度目のショージキ　177
あのころは森があった　182
首まきグマ　187
ひとみがともるとき　192
鬼は内…　196
春の水族館　200
サクランボのみのるころ　207
さよならの学校　212
あとがき　217
解説　岩瀬成子　219

編　集　小宮山量平
装　幀　平野甲賀
装　画　長新太

制　作　山村光司
発　行　鈴木良司
製作担当　金井重雄
　　下向実
編集担当　日比野茂樹
　　高林久美子
　　成澤栄里子

製　作　P&P
本　文　加藤文明社／よねむら写植
表　紙　ダイニック
カ　バ　ー　トラヤ印刷
製　本　誠製本
用　紙　十条製紙／日興紙業

今江祥智の本　第31巻

オーケストラ物語

2杯目のスープ

オーケストラ物語

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

タクトちゃん

シャムねこのタクトちゃんのかいぬしは、父さんもむすこもオーケストラの指揮者だった。ふたりともそろってかっこよかった。いつもむねをそらせて歩き、ちょっとすましているのが、すらりとしたからだにぴったりだった。だからタクトちゃんも、できるだけそのようすをまねた。いつもむねをそらせてちょっとすまして歩き、きんじょのかいねことはちょいとちがうし、のらねこなんかとはおおちがいなところをみせつけてやった。

きんじょのかいねこものらねこも、そんなタクトちゃんのことが気にくわない。へこませてやろうと、ふいにおそいかかったりするのだが、タクトちゃんもなかなかのもの。風のようにみをかわし、しっぽのひとふりひとうちと、ウニャン！　のひとほえで、かえってあいてをへこませた。そのひとふりもひとほえも、かいぬしのやりかたを、みようみまねでまねてるうちにものにしたけんかのわざだった。オーケストラのれんしゅうじょうまででかけて、かいぬしのやりかたをじっくり

ながめてはまねているうちにおぼえたものだ。タクトのふりかたやら、オーケストラのどなりつけかたは、むすこと父さんはうりふたつだった。そしてタクトちゃんのまねっぷりもふたりとうりふたつだった。それやこれやで、タクトちゃんは、いつのまにやら、そのあたりのボスになっていた。

それもかいぬしのおかげと、タクトちゃんはいよいよまねにはげんだ。

ところがある日のこと。むすこのほうが家にかえってくると、これまでしたことのないしぐさをくりかえした。あたまをかきむしり、すわりこみ、あたまをかかえこんでじっとうごかないのだ。

（あたらしい指揮のしかたかな？）

と、タクトちゃんはおもい、さっそくまねてみた。あたまをかかえこんですわりこんだシャムねこ。それはまたちょいとしたもので、そのしょうこに、そんなタクトちゃんにほれこんだ白ねこがいた。すがたのよいねこで、そのやさしいはないきを耳もとにかんじたタクトちゃんは、ふりむくなりそのねこのことを気にいってしまった。さそわれるままに、タクトちゃんは家をでて、白ねこといっしょにくらすようになった……。

さて、こんどは、どうやらかいぬしがかいねこをまねることになったようだった。ある日、むすこは父さんをすて、タクトちゃんみたいに家をでて、じぶんがほれこんだおじょうさんといっしょにくらしはじめた。父さんはむすこにほえたが、むすこはへいきだった。タクトちゃんは、そのいきさつもちゃんとしっていて、

（一曲くらいなら、ぼくがむすこさんのかわりに指揮してあげられるんだけどな……）
などと、こっそりおもっているのだった。

クラちゃん

—あなたのこと、あたまのてっぺんから足のさきっちょまで、すてきだなとおもうけど……。
と、いいだしたのは、オーケストラのクラリネットふきのひとり、牛田さんのおくさんだった。
—……けど、なあに？
クラリネットのれんしゅうをやめて、かおをあげて牛田さんはききかえした。
—ひとつだけ、ちょっとやなくせがあるんだけどなあ。いって、いい？
おくさんは、おもいきったようにつづけた。
ふたりにかわれているスコッチ・テリアのクラちゃんも、ふたりのことばのちょうしにつられて、すわりなおしてきき耳をたてた。
—あなたのふくクラリネットの音ってすてきだけど……。
—……けど、なあに？

―クラリネットふくときに、あたまふるでしょ。とっても。

―……うん。

―あンときかみの毛がぱらぱらくずれて、みっともよくないの。

―よくないったって、クラリネットって、いちばんふきにくい楽器なんだ。だから、どうしても力がはいっちゃって、あたまふっちまうんだ。しかたないんだ、ほんと。

牛田さんは、しかたなさそうに、そういいわけした。でも、なんとかならないかなー……と、おくさんはくいさがった。なんともならなーい……と、牛田さんもくりかえした。

クラちゃんは、ドキンとした。おくさんはときどき大きなほねをくれる。これをしがめば、歯がつよくなるから……というわけらしかった。むろん、クラちゃんはありがたくいただく。ところが、そのほねときたら、大きくてかたいものだから、両手でおさえてかぶりつく。そして気がつくとあたまをふっているのだ。クラちゃんは、じぶんのたべぐせのことをいわれたみたいでシュンとなった。見ると牛田さんもしょげたみたいで、れんしゅうをやめてしまった。

*

―やっぱ、だめだ。力がはいらないもんな。

十日後、牛田さんはおくさんにそういった。おくさんは牛田さんのことをじっと見つめ、ひとつくらいすてきでないとこがあっても、いいとしておくか……といった。

—でないとわたし、あなたにクラクラしっぱなしだもン。

クラちゃんも、ほっとした。これで大いばりであたまふりふりほねをしゃぶられる……。クラちゃんは牛田さんとおくさんのことをあたまのてっぺんから足のさきまですてきだとおもいながら、ほねにかぶりついていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com